

区切りの書—恩師の悲報のなかで

退職を来年3月にひかえ、この道に入ってから区切りの書（店じまいの書）である『基礎学問としての会計学』（中央経済社、2018年2月刊行予定）も、1月10日に再校を終え、これでほぼ仕上がった感がある。執筆中、敬愛する井尻雄士先生（カーネギーメロン大学名誉教授）の逝去の悲報に接し、悲しみと虚しさのなか、なんとかここまでやってこられた思いがする。

この300ページ余りの書物は、主として2000年以降に執筆した論考から本書の主題にあうものを選んで再構成したものである。序文の冒頭では、「会計学のような実学性の強い分野にあって、プロフェッションの役割とは区別されるアカデミズムの本来の役割ないし任務（存在意義）は何か。本書が意図するテーマはここに根ざしており、収めた論考は（初出一覧参照）それぞれの文脈、意味合いでこの共通テーマにかかわっている。本書では、その意義と役割を特に基礎論的研究に求め（基礎学問としての会計学）、それを以下で示す3つのパートでもって構成している」と記している。

言ってしまうと、過去の論文集ということであるが（その点で後ろ向きの仕事）、それではもの足らないので、そこに全体をつなぐストーリーをつけること、つまり1冊の書物としての体系性をどうつけるか、そこが一番の苦勞であった。それが3部構成の書になったのである。

会計研究のオポチュニティ・コスト—「選択の自由」のコスト

さて、ここからが本題である。先に述べたように、私は本書でもってこれまでの仕事のけじめ、区切りをつけたいと思った（※注1）¹。と同時に、本書を仕上げながらあらためて気づかされることもあった。それは、この道に入ってから以来、自分の仕事はこの基礎学問につながる会計学を志向していたようであるということ、またその点で今振り返ってみれば時々の論考も一見個々バラバラのように映るがその志向性のもとで繋がっていたのではないかということである。

ただ、その3部構成の全体が仕上がってみて思うことは、謙遜でもなんでもないが、それがたかだかこれだけのものかという思いにかられることである。実際、読み手からそう言われたとしても、それに反論する術を持たないというのが正直なところだろう。そこで、しばし立ち止まって思うことがある。端的に、会計研究のオポチュニティ・コスト（opportunity cost、機会原価）という点である。

そこで、オポチュニティ・コストということであるが、それは「自由と選択」という点にかかわる。すなわち、複数の選択肢のもと（選択の自由）、ある選択をしたとき、ここでは会計研究の道を選んだことになるが、それはとりもなおさず他の道（選択肢）を棄却す

ることにひとしい（※注2）²。意識するしないにかかわらず、「選択」という表面には必ず「棄却」という裏面が伴うのである。まずここをおさえていただこう。そして、選択されなかったもの、つまり棄却された選択肢のなかで最大のベネフィット（利益）、これが選択されたもののオポチュニティ・コストとなる。

それゆえに、かりにその利益を上回るものがなければ、その選択には”損失”つまりある種の”悔い”がともなうことになる。オポチュニティ・コストは機会損失（opportunity loss）でもあるが、それはまさにリグレット・バリュー（regret value、後悔値）とも言われる（※注3）³。

会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計

さて、私の場合、それにあてはめて考えてみると、文字通り“つぶやき”になるが、どうもオポチュニティ・コストの方が大きいように思えてくる。

むろん、その選択されなかったものの利益はあくまで現実のものではなく仮想の利益なので（オポチュニティとしての利益）、そしてそれは心理的には通常幾分過大に見積もられがちであろう。それでもなお、つまりオポチュニティ・コストを過大に見積もらなくても、この道すなわち会計研究の道を選択したことが、そのオポチュニティ・コストをはるかに上回るという確信がなかなかもてないのである（※注4）⁴。平たく言えば、やらなかったこと、やれなかったこと、そして失ってきたこと、どう見積もってもこちらが大きいということである。

大学院時代から数えて40有余年、その歩まなかったいくつかの道を思うとき、そのオポチュニティ・コストは計り知れないものがあるように思えてならない。こと研究ないし学問の道に限ってみても、社会科学とりわけ会計学とは違う道は当然あったわけで、今回の区切りの書にもとりわけ注書きのなかにしばしば顔をだしてくる人文科学や自然科学との接点の模索には、そのことがいみじくもあらわれている（※注5）⁵。

それは、私自身がこの道に入って以来ずっといできてきた会計研究の葛藤、端的に言えば「会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計」と強く結びついている。すなわち、「たかが会計」と割り切れればよいが、「されど会計」を追い求めてきたいわば苦悩と葛藤のあらわれなのである。この点で、「会計研究のオポチュニティ・コスト」と「会計研究のアンビバレンス」（14年前の講演）とは相互に関連しているのである（※注6）⁶。

追記—再読に耐える会計書を

その後、3月に入って『基礎学問としての会計学』が完成しかなりの冊数を献本したが、その「献本のご挨拶」の手紙のなかで「再読に耐える書」という点に触れて、次のように記した。

ところでもう14年も前（2004年）になりますが、慶應義塾大学で「会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計」と題して話しをいたしましたさい、その最後において、

私が将来書きたいと思う会計書は「されど会計」に密接にかかわる書、「再読に耐える会計書」だと申しました。はたしてこれまでの仕事の区切りになる本書がそうした会計書になっていますかどうか。

さて、その判断はむろん読者に委ねられるものだが、かりに再読に値する書であったとしても、そしてそれがオポチュニティ・コストを上回るものであればいいが、たとえそれは無理にしても少なからず機会損失を埋め合わせることができるなら、最後の仕事としてそれなりの意味はあるといえるのかもしれない。蛇足ながら、そうでも思わないと、この1年以上の長きにわたる仕事はできなかつたように思うのである。はたして「再読に耐える会計書」になっているのだろうか、なお自問がつづく。

※注

¹ 1) この点は、すぐ後で述べる「会計研究のオポチュニティ・コスト」と密接にかかわっているが、それとはまた別の観点（出家的人生、ご破算的人生という生き方）からも別途のブログとして記したいと思っている。

² 2) この道に入る最も大きなきっかけは井尻作品との出会いであった。詳しくはHP掲載の「会計研究のアンビバレンスーたかが会計、されど会計」と題した講演（慶應義塾大学、2004年）参照。

³ 3) ちなみに、この機会損失に基づいて不確実性のコスト（裏面）と情報の価値（表面）を論じたのが、もう30年前になるが、拙著『情報評価の基礎理論』（中央経済社、1988年）である。

⁴ 4) ちなみに、かの有名な「この道より我を生かす道なし、この道を歩む」（武者小路実篤）と比較すると、そこにはここでいうオポチュニティ・コストとは無縁の世界（迷いのない境地）がある。対して、筆者の道には必然性（この道より我を生かす道なし）を見出しがたい。

⁵ 5) やれなかったことの一例を挙げれば、社会思想や哲学の類い、あるいは文学・文芸など（もっともそれでもって生計を立てることなどとてもできないが）。会計学のなかに限ってみても、その道づけには難しさがある。この点は、拙稿「井尻作品のコアにあるもの」『企業会計』2017年9月号141頁での「Ⅶ 会計研究の『道づけ』の難しさー自由と苦悩」参照。

⁶ 6) 「たかが会計」と割り切れれば、オポチュニティ・コストは考えもしないだろう。なお、会計研究のアンビバレンス（相反するものの双方志向性）については、注2の講演に詳しく記している。